



TITLE:

<シンポジウム 米英における英語教育> 英国
における 'Teaching English as a Foreign
Language' : The Bell School of Languages,
Cambridge での見聞記

AUTHOR(S):

尾崎, 寄春

CITATION:

尾崎, 寄春. <シンポジウム 米英における英語教育> 英国における 'Teaching English as a Foreign Language' : The Bell School of Languages, Cambridge での見聞記. 英文学評論 1964, 15: 2-12

ISSUE DATE:

1964-03

URL:

https://doi.org/10.14989/RevEL_15_2

RIGHT:

本シンポジウムの講演者は勿論、それに列席された聴衆の大部分は、日頃英米文学を研究されると同時にそれぞれの職場で学生に英語を教授されている方々である。文学を専攻すると同時に言語を教授しているのが私共教官の実態である。だから私どもは、好むと好まざるに拘らず、大学における英語教育に関心を持つことは教官として当然の義務といふべきである。そう考えると、私どもの関心を最も強く引くものは、大学の英語教育の現状において英語が完全に言語として学生に教えられているかということである。成程言語は文化と、引いては文学と密接な関聯をもっていて、言語に関する限り文化と文学を無視することは出来ない。だからといって言語の芸術ともいふべき文学だけを強調して、文学の基調となっている言語の機能を軽視してはならない。そこに英語教育の問題が胚胎していると考えられる。だから講演者たちが、それぞれアメリカとイギリスの大学において体験された英語教育に関する知識を報告されているうちに、自ら私どもが直面するいろいろの英語教育に関する問題意識が窺われるだろう。この意味において、講演者は勿論、聴衆者の方々もこれを契機として、私ども英語教官が直面する問題に考察を展開していただければ、本シンポジウムの目的の一端は達せられることになると思ふ。

最後に、本シンポジウムの題目を「米英における英語教育」として「英米……」としなかったのは、前述のようにアメリカに行ったものが3人に対しイギリスに行ったものが1人といった比率から、自然その報告がアメリカのものが主となり、その上戦前の吾国英語教育界における所謂「新教授法」は E. H. Palmer 教授のものが主流であったに対し、戦後の新教授法は Fries 教授に端を発したアメリカ式のものが主流をなしている関係上、便宜的に如上の形式の題目を採用したわけである。

英国における

‘Teaching English as a Foreign Language’

——The Bell School of Languages, Cambridgeでの見聞記——

尾 崎 寄 春

外国語としての英語教育の研究が、いろいろな原理・理論に立脚して、科学的とさえ云

いうやり方で進められているアメリカと比較すると、イギリスでは、英語を習いに来る外国人に英語を教える方法は、方法としては、あまり考えられていないのではないかと
いう印象を受ける。最近の『タイムズ文芸附録』（十月十八日）の社説（‘English for Others’）の論調からしても（もっとも、これは主として『海外（といっても低開発地域）における英文学教育』（*The Teaching of English Literature Overseas*, Methuen）を扱ったものだが、ここに引き合いに出されている『現代英語の研究』（*The Study of the Present-day English Language*, Leeds University Press）の取り上げられ方からみても）、問題の中心は、実用英語と文学の兼ね合いをどこに見出すかという点にあるようである。

イギリス人には、本国語を本国の文学から切り離して考えることができないのか、言語教育の実際は文学作品（それがどのように‘adapt’されたものであれ）を素材とする他
ないと考えているのか、そこところは速断は下しがたいが、心理学、社会学、人類学その他の援用を含めた言語学上の理論の応用科学としての英語教育の方法・理論といったものは、イギリス本国にあってどの程度おこなわれているのか、少なくとも僅か九カ月の私の
ケインブリジ滞在期間中では、窺い知ることはできなかった。

と云っても、外国人に対する英語教育が盛んでないと云うのではない。それどころか、
ヨーロッパの各地から、否アフリカは勿論、中南米やソビエト連邦からさえ、本場に英語を習いに来る人間の数は年々増加の傾向にある。そしてこの需要の増大に応じて、外国人
相手の英語学校の数もふえる一方である。小さなケインブリジの町だけでも、この種の学
校は、正確な数は記憶にないが、五指にあまると思われる。私が籍をおいていたのも、こ
の種の学校の一、The Bell School of Languages で、これからの話はこの学校での経験
に限られることになろうが、最近うけとった同校の会計の人の手紙（十月二十六日附）に
よると、この夏の学期は大変なものであったらしい。正式の Summer Term のほかに、
同校の生徒宿舎二つをフルに利用して、短期（三週間）のコースが八コース（それぞれの
生徒数六十人）も平行しておこなわれたという。

ここで断っておかねばならないのは、このようにしてヨーロッパからイギリスのこのよ
うな学校に英語を習いに来る生徒の大部分は、所期の免状（主として、ケインブリジ大学
が出す The Certificate of Proficiency in English）をとると、さっさと国に帰って就職

するのが常であり、いわば就職を有利にする一つの資格を得るためにイギリスまで免状をとりにくるというのが実状のようである。とすれば、多くの移住民をかかえ、さし迫った必要から始められた（と——もし私の記憶違いでなければ——聞く）アメリカにおける外国語としての英語教育と、イギリスの、少なくともこのような生徒が中心になっているベル・スクールのような学校での英語教育との間に、相違（それがどのようなものであれ）があってむしろ当然だし、それに、イギリスにあってはいまだに‘a certain snobbish pre-eminence’をもっているとラッセルが云う文化的伝統に対するイギリス人の自負といったものが絡まって、初めに述べたような英語教育に対する態度の相違が生じることにもなるのであろう。アメリカにおいては、能率ということが、できるだけ早く実用的な英語を教え、それを使っての（その国での）日常生活を可能ならしめることが、焦眉の急であったのであって（そしてこの段階においては教養英語などというものは、必要でないどころか、百害あって一利のないものであろう）、言語構造・心理の研究、また発生的事実から言語教育は先ず喋ることから始めねばならないといった根本的な態度も、それが自然な学習方法であるということと同時に、なによりもそれが最も能率的な方法であるという確信によるものと思われる。これに反してイギリスでの英語教育は、能率ということを頭から考えに入れていないようだと言って、たまたまストラトフォード・オン・エイヴォンで逢った日本人と歎きあったものである。どうもイギリス人は考え方が単純で、自然な環境をととのえてさえやれば、言葉というものは自然におぼえられるものと思っているらしいなど。そしてこのイギリス人の考えは、ある意味で、全く正しいのである。帰国の途中、マルセイユから乗った船の中で、七年ぶりで日本に帰るという日本人の女の人に逢った。大学教育を受けた人ではなかったが、七年間マルセイユで生活してただけに、マルセイユ訛りの強いフランス語ではあったが日常生活の用にこと欠く様子もなく、結構フランス人の船員たちと話をしたりフランス語の映画を楽しんだりしていた。ただ意外だったのは、フランス語を聞いたり話したりすることはできても、書いたり読んだりすることはできず、御主人からの手紙やその返事は、人に頼んで読んで貰ったり代筆して貰わねばならなかったということである。しかし考えてみれば、こんなことは意外でも何でも無いことだろう。日本でも、昔から、読み書き算盤という。人の話を聞いたり喋ったりすることは、これは自然な環境にあれば習わずともできることだが、読み書きとなると、かなりの知的訓練を

必要とする。^{*}ただ、日本人という、外国語を喋るのは下手だが、読み書きは、かりにも外国語を学んだ者なら誰でもできるという考えがあまりにも普通になっているので、喋れるからには当然読み書きができるものと、不覚にも思い込んでいたために、意外と感じただけのことなのであろう。思えば迂闊な話で、喋れるからといって読み書きができると限ったことではないのである。それでまた思うのだが、中学英語程度では喋るだけでもいいが、高校英語ではかなりの程度の読み書きができ、大学の教養英語ともなれば英米の教養人が読む程度の文章を読みこなすだけの力をつけてほしいものである。

閑話休題。ベル・スクールの様子を簡単に紹介しておこう。授業は大体 15 のグループに分けておこなわれる。第一のグループは、昨年の例で云うと、ケインブリジ大学の ‘Diploma’ (in English Literature) をとりに来ていたエジプト娘と私だけ。この授業内容はその年の ‘Diploma’ の試験に課される ‘set books’ によってきまるわけだが、私は ‘Diploma’ をとる積りはなかったし、また二人の学歴に多少の差があったので、この小さなグループはさらに二つに分けられて、ほとんど個人指導という形をとっておこなわれた。テキストとしては、Shakespeare の *Antony and Cleopatra*, *Measure for Measure*, Richard Hoggart の *Uses of Literacy* (Pelican Books), Dr. Johnson の *Lives of the Poets*, Aldous Huxley の *Selected Essays* (Chatto & Windus), Raymond Williams の *Bourder Country* などが、literary criticism などのプリントと平行して用いられたが、委しいことは ‘Diploma’ の受験要項を見ていただければよい。第二グループから第七グループまでは、大体同じような授業内容で、‘Proficiency’ をとる生徒（これがベル・スクールの生徒の大半を占める）を対象としておこなわれる。ただ文法が、第二、第三グループにおいては、やや程度が高いようである。第八から第十一までのグループは、‘Lower Certificate’ をとろうという生徒で、この授業内容も大同小異。残りのグループは本当の初心者ということになる。

^{*} このことと関連して興味深いのは、自由に、そしてまことに自然な調子 (intonation) で英語を喋ることのできる外国人の学生が、ごくやさしい文章でもそれを声に出して読むとなると、必ずしも喋るときと同じような自然さで読むことができなかったという事実である。それは、つまり、音声に再現するまえに、文章の内容なり感情に対する理解が要求されるからであらう。喋る場合にはその必要はない。自分の自然な感情をそのまま自然な調子で（これは英語も日本語も変りはない）表現するまでである。逆説めくかも知れないが、文章を自然に読むことよりも、自然に喋ることの方が容易なのである。

時間割はどのグループにも共通で、一時限（9.30 a. m.～10.15 a. m.）と二時限（10.20 a. m.～11.00 a. m.）の後に半時間の‘tea-break’があり、食堂にかけつけてそれぞれ好みの refreshments をとる。その後、三時限（11.30 a. m.～12.15 a. m.）、四時限（12.20 a. m.～1.00 p. m.）があって、一時間十五分の‘lunch hour’となる。午後は五時限（2.15 p. m.～2.55 p. m.）と六時限（3.00 p. m.～3.45 p. m.）で、その後食堂で tea（または coffee）をとってもよし、すぐに bus stop にかかけつけるもよし。勿論 refreshments は学生の common room や美しい garden に持ち出して楽しむ可である。Easter Term など、気候がよくなると、授業そのものもベランダや庭に deck-chair をもち出したり芝生の上にじかに腰を下したりして、青空のもとでおこなわれたりする。私個人は、この時間割を適当に配分（arrange）して、大学の講義や大学図書館に通ったりした。自転車を大いに活用したことは云うまでもない。

ところで、第二グループ以下の授業内容をもう少し具体的に云うと、第二グループから第十一グループまで、それぞれの程度に応じて précis, composition, grammar, usage, translation, dictation, conversation, phonetics, comprehension, literature の授業がそれぞれ週二時間おこなわれる。この最後の literature はその年に大学が試験に課する‘set books’によってテキストがきまるが、‘Proficiency’では Shakespeare が必ず一つ入っていて、昨年度は *Richard II* だった。その他、‘Proficiency’のクラスでは、週二時間の social and political background, literary criticism, history, institution などの授業が加えられる。教科書の名前を一々挙げるのはさし控えるが、たとえば social and political background には Huxley の *The Brave New World Revisited* が、institution には Peter Brawhead の *Life in Modern Britain*, Harold Plaskitt と Percy Jordan 共著の *Government of Britain* が使用されていた。その他、週一回、外部から（ときにはベル・スクール内部の）講師を招いて講演がある。イギリスの警察制度の話のときには、警察から部長級の人を招くといった具合である。

このようないわば総花的な、よく言えば英語を、それを育んできた環境のさまざまな要素との関連において教えようという行き方には、アメリカの英語教育にみられるような集中性といったものは見うけられない。今にして思えば、ベル・スクールのような学校においてもある程度能率ということが要求される「初心者」向きのクラスにこそ、むしろアメ

リカの行き方に近い方法がとられていたのではなかったかと、これらのクラスに一度も顔を出さなかったことが今さらのように悔まれる。

ところで、以上のようなプログラムに従っておこなわれている ベル・スクールの授業に、もし何らかの統一を与えているものがあるとすれば、それは ‘senior tutor’ の制度であろうか。と云っても別に大したことではない。ただ各グループに担任の先生がついて、この先生から文法を、これは毎日習うという制度である。これは外国語を学ぶ場合、ただ一人の先生から学ぶことを危険視するベル校長の ‘English compromise’ とも云うべきものであろうか。つまり外国語をただ一人の先生から学ぶ場合、その先生の癖に馴れることは比較的容易で、すぐに、これで hearing は大丈夫だ、英語が分かる、と思いがちなものである。ところが現実に語られている英語は、語る人によって多少とも異なっているのだから、このような誤った自信は英語の上達の妨げになるばかりである。というので時間割はできるだけ多くの違った先生に習うように組まれているというのが、principle らしい principle のないベル・スクールの数少ない principles の一のようなものである。

実際イギリスに行っているいろんな人と話してみても、その話し方の臆面もない個性の豊かさに驚くと共に、それならこちらだって、話し方なり発音に個性（？ 日本人としての、そして私個人の）が出たってそれ程気にするには及ばないのではないかと、逆に変な自信をつけてしまった。事実われわれが日本語を喋る場合だって、めいめい勝手な喋り方をして不思議に思わない。そしてこの日本語における個性は、外国語を喋る場合にも、否応なく出てくるようである。日本語で早口な人は英語でも早口になる傾向がある。その逆また然り。私の友人で、すでに滞米十二年、英語がもうペラペラの男が数年前、約十年ぶり度一度帰国したことがあったが、その時その男の喋るアクセントの強い英語が、やはり個性の強い彼の日本語の調子そのままであることを興味深く聞いたことを思い出す。

もっとも、だからと云って、英語をどう喋ってもいいということにならないのは勿論であって、当然そこには一定のルールがなければならず、特に日本人が注意しなければならないのは、日本語にない子音の発音ではなく、むしろ日本語にあるようでその実、似て非なる曖昧母音 [ə:] と、それからこれは現在の日本語にはない複合母音 [wu:] の発音のようである。日本人の英語を英語らしく響かせない曲者は、どうやらこうした母音にあるようで、実際英語で ‘woo’ することは勿論、‘wood’ の縁を賞讃することも、‘Would

you please ...?’と云って人に物を頼むことも、なかなかどうして容易なことではない。

それはともかく、話をもとへ戻せば、ベル校長の principle の他の一例は、先の principle からも想像されるように、実際の英語教育以前の、たとえば教員の採用基準などに見られるようである。それは、外国語ができる人、ということだ。これは一つには、過去六年間に六十五カ国から生徒が集まったというベル・スクールの国際的な性格にもよるのだろうが、(そして実際 translation のクラスは、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ギリシヤ語は勿論、北欧諸国の言語から日本語のクラスもあり、ロシア語の初等講座も開かれたりする。The Bell School of Languages と呼ばれる所以である)、それだけでなく、自分で外国語を少なくとも一カ国語マースタして、外国語を学ぶ困難を身にしてみても知った者でなければ自国語を教える資格はないというのである。ゲーテのいわゆる「外国語を知らざる者は自国語を知らざるなり」というところか。ロンドンのバスに、歯みがきの広告(‘Did you clean your teeth, today?’)とギネス(黒ビール)の広告(‘Have you had your Guinness, today?’)が隣り合って貼られている。この両者のテンスの使い分けを外国人に説明できないようでは駄目だということである。しかし、こうして採用された教員が、実際に教えるときに従わねばならないという極まった教授法はない。あとはその人の個性と経験にまかせるというところらしい。

最後にもう一つ。これはイギリスにあっては何もベル・スクールに限ったことではないのだろうが、英語を習うにもっとも適した、自然な環境をととのえるということである。これなど、ある人にとっては余計な配慮と思われるかも知れない。ケインブリジで一定期間生活するというだけで十分ではないかと云う人があるかも知れない。またその通りなのかも知れないが、しかしそれだけでは十分とせず、paying guest として生徒が泊る下宿は可能なかぎり学校の方で検討してこれを登録し、学校に属している二つの生徒宿舎にもそのそれぞれに経験のある‘warden’をおくと同時に、ケインブリジで学ぶか働くかしている若いイギリス人の男女を各宿舎に五人ないし六人泊めることによって、対人関係における理想的な環境をつくろうと努力しているところにベル・スクールの特色があるように思われる。実際イギリスに半年や一年いたからといって、適当なイギリス人の話し相手が自然に出来るとは限らないし、また学校を離れると、いや学校のなかでさえ、どうしても共通の母国語で喋りがちな生徒たちに、日常生活においてもその機会を与えてできるだ

け英語を喋るようにしむける、これは一言にして云えば、英語の可能な限りの生活化ということであろう。このようにして初めて英語の力の自然な上達が望まれるのではなからうか？

話は変わるが、昨今のように英語の会話能力がやかましく云われるようになる以前から、日本においても英会話に堪能な人がいくらかいたのは、それはその人たちが学校での英語の授業に熱心だっただけでなく、それぞれの生活環境に応じ、必要に応じて工夫をこらし、できるだけ英語を話す機会をとらえ、あるいは作り、できるだけ英語を生活の中にとり入れることによって、その人なりの英語の生活化に成功した結果であろうと思われる。現在では、映画、テレビ、ラジオと、その気になれば利用できる条件は結構すぎる程とのっているのに、英語は学校で習うときだけ。あとは英語と無関係な生活をしているというのでは、イギリスにあってさえ（と云うのは極端かも知れないが）十分な成果は望めないのである。これでは試験の前夜に詰め込み勉強をして、試験が済めばきれいさっぱり忘れてしまうというのと大差はない。日本人で、喋る方はあまり達者ではないが、読み書きにすぐれた力をもっている人が多いのは、日本においては、まだ、英語を喋ることよりも読み書き（特に読むこと）のできる方がはるかに重要であるということばかりでなく、後者が前者に比べてはるかに生活化が容易なためではなからうか。読み書きになら相手はいらない。またいつでも、どこでも、好きなとき、好きなところできる。が、日本においては、一般の人が英米人の話し相手を見つけることはまだまだ容易でないし、また日本にいる限り、なにも無理して英語を喋る必要は少しもないのである。日本人の英語における読み書き話し聞く能力の不均衡は、これまでの日本の英語教育の不備によるのもあろうが、そしてまた人とのつき合いを煩わしく思い、書物を友とすることをより好む日本人の国民性にもよるのかも知れないが、なによりも根本的には、上に述べた英語の生活化の難易の差によるのではなからうか。英語が読めても話せない日本人が多いのには、それなりの必然性があるのであって、これが根本的に変化しない限り、日本人の英語能力の不均衡は、学校における英語教育の革新だけでは是正されたいであろう。

ところで、話をイギリスに戻せば、この人間関係における理想的な環境をつくり出そうとするベル・スクールの努力は、さらに生徒が大学および大学院の学生と接触する自然な機会をできるだけ多くつくろうという学校側の積極的な態度にも見ることができる。そし

てこの点では、ベル・スクールは、きわめて有利な特殊性をもっているのである。これは、フットボール・チームの顧問をしている会計氏にはきわめて不利なことでもあるのだが、ベル・スクールは女子が圧倒的に多いのである。先にふれた氏からの便りで、氏は、この Michaelmas Term は生徒数 175 名のうち男子はわずかに 38 名だと云って、チームづくりのむずかしさをこぼしている。このフットボールの対校試合も、他校のイギリス人学生との接触を目的としたもので、Michaelmas Term には都合 21 回の試合が予定されており、オックスフォードまで遠征もすれば、またベル・スクールにも迎えうち、地元のコリジでは Corpus Christi, St. Catherine's, Queen's, Peterhouse, Jesus, Trinity Hall, Downing, Trinity, Clare, Christ's, St. John's と、それからオックスフォードでは Balliol College と、対戦する。ちょっとしたものである。が、生徒たちがもっとも親しく接触するのは各学期の始めと終りに催されるダンス・パーティであろう。そしてこの学期のように男子と女子の数が 38 対 137 という比率では、もしすべての女生徒にパートナーをあてがうとすれば百名近く（というのは不可能なことだが）の男子を外部から、つまりは大学および大学院の学生から呼ばねばならないことになる。ということは、ベル・スクールの生徒にとっては、それだけ多く教養あるイギリス人の青年と交わる機会がふえるということである。その他、たとえば毎週火曜の夜に催されるブリジの会でも、そのメンパには必ずイギリス人の学生が数人呼ばれることになっている。このようにして知り合ったケインブリジ大学の学生とベル・スクールの生徒たちは、時にはコリジに、時には各自の下宿に、お茶に呼んだり呼ばれたりしながら、また気候がよくなれば punt と呼ばれる小舟のりにバックス (the Backs) に出かけたりしながら、ごく自然に hearing と speaking の練習をするわけである。メキシコから来た女生徒がさかんに 'can't, 'can't' と発音の練習をしていたのも、やはり 'punting' に行ったときのことであった。

日本人には曖昧母音がむずかしいと先に述べたが、私自身、can't を [ka:nt] と発音して、もっと口の奥の方で発音するようにと発音学の先生に注意されたことがあった。発音記号で書くと、それは（日本の辞書にも拘らず！）[kə:nt] となるらしい。アメリカ人は子音で区別する（つまり [kæn] に [-t] をつけて）ようだが、われわれは母音で（つまり [æ] を [ə:] に変化させて）区別する。アメリカ人のように発音されると、特に電話で話をしている場合、語尾が聞きとりにくくて判断に困る、とその発音学の先生はおっ

しゃった。ところで、この‘can’t’の発音を直されたのは日本人の私だけでないことが、偶然あきらかになったのだ。その日も、気の合った者同士が数人（日、英、スイス、フランス、トルコ、メキシコといった国際色豊かなグループ）、夕方からボックスに出かけて、Queen’s, King’s, Clare, Trinity, St. John’s, Magdalene などのコリジの裏に流れるカム川を堰（Weir）のところまで下り、夕闇にほんのり白く浮かぶ桜の花や、柳の木影にひっそり眠るあひるの群に近く去らねばならぬケインズリジの風情を惜しみ、暗くなった水面にそこだけ暮れ残して白くぽっかり浮かんでいたのが、突然はげしく羽ばたいて水面を走り出す白鳥におどろかされ（このときは懷中電灯をもち込んで舟の中で宿題はやらなかったと思う）、St. John’s の裏手の泥深いところで危うく棹をとられそうになったりしながら、再び発着場に戻って来たのは十時を少しまわっていただろうか。腹がへったというので衆議一決。これも行きつけの中華料理店に繰り込んだ。六人で七品注文して、料理が来るまでの間、人のいい大学院学生をつかまえて皆で散々イギリス人の悪口を云い、彼はまたむきになってこれに応酬していたのだが、それを黙って聞いていた私の耳に、メキシコ人の女の子が発音した‘can’t’という単語がいやにはっきり響いた。いやにはっきり聞えたのは、それだけが特に意識された発音であったからで、しかもその母音は実に美事に発音されていた。思わず彼女の顔を見てにやりとすると、彼女も気附いてにやり。実は発音学の先生に直されたのだと白状した。そしててれ隠しに‘can’t’, ‘can’t’を連発する。そこへ運よく料理が来たというわけだが、このようにしてベル・スクールの生徒は、‘can’t’, ‘can’t’と云いながら、中華料理を食べながら、舟遊びしながら、お茶に呼んだり呼ばれたりしながら、自然に英語を身につけていくようである。

〔附記。この稿を書き終えてから、最近の「朝日新聞」（38年12月25日）紙上で、宮城音弥氏が氏の中学時代を回想して、「戦後の学校には『英語〔の会話？〕のできない英語の先生』が多いし、その点を指摘すると『ロンドンのコジキだって英語は話せるさ。われわれは英文学を教えるのだ』という、えらい先生が少なくない。こんなえらい先生がいなかったおかげで、私はヤクに立つ英語を学ぶことができた」と云っておられるのを読んだ。しかしながら考えてみれば、氏が中学で「ヤクに立つ英語」を学ばれたのは、あまりにも当然なことであろう。けだし中学では、新制の中学では特に

「ヤクに立つ英語」しか教えることができないからである。誤解されると困るが、私はここで中学の先生のことを云っているのではない。ただ習う者の立場からして、中学生の能力としては、「ヤクに立つ英語」しかおぼえることができないのではないかと云うのである。ヤクに立たない(?)英語——英文学だとか英米の教養人の用いる英語——は、大学の教養英語にまたねばならないのではないかということなのである。]

米国における

‘Teaching English as a Foreign Language’

——特にミシガン大学の M. A. Program を中心として——

安 藤 昭 一

米国における英語教育について述べるのが、このシンポジウムに於ける私の分担課題であるが、時間の制限のためテーマを次のようにしぼりたい。即ち、先ず第一に米国における Teaching English as a Foreign Language という概念と実体を略説し、その中で M. A. Program の位置づけをする。次に私の最も詳しいミシガン大学の M. A. Program を紹介しつつ、その特徴を考察する。そして最後に、それとの対比において、わが国の英語教育の問題点を指摘する。限られた時間内で、米国の英語教育一般についても語り、かつ問題の中心を逃さないためには、このような説き方をするのが最善だと考えるからである。

さて English as a Foreign Language という概念は、一方において English as a Native Language と対立し、他方において English as a Second Language と相対する。母国語としての英語教育は言う迄もなく国語教育の分野に属し、間接的にわが国の大学等における上級クラスの英語教育の参考に資すべき点はあるが、直接的には外国語教育の分野より外れるので、ここでは取りあげない。従って以下で英語教育とだけ呼ぶ時も、外国語としての英語教育を指しているものと解していただきたい。

次に、English as a Foreign Language と English as a Second Language とは、今なおアメリカでも混同して無差別に使われている場合が多いけれど、ミシガン大学では